蘭奢待新田系圖脚本　上の巻

164
6
50

088809-000-8

特52-597

蘭奢待新田系図　上の巻

近松　半二／原著

M27

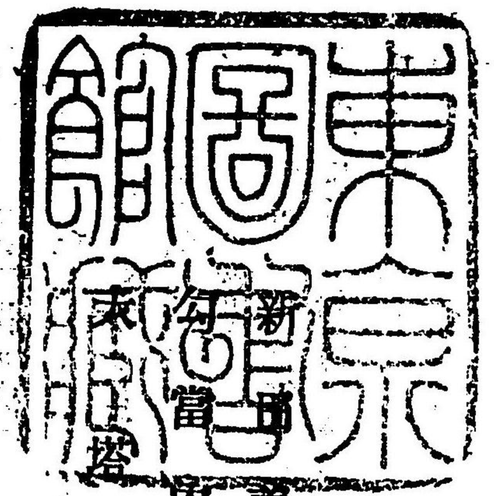
DBJ-0469

蘭奢待新田系圖脚本上の卷

近松半二原著
岡野美春補綴

故

足利尊氏
坊門清忠
群臣大勢
惡摩二人



本舞臺一面平舞臺向ふ黒幕正面中央に壇を築き神鏡幣帛を飾り八ッ足の臺に神饌を供ふ總て苑中雨乞の体幕の内より大塔の宮ハ壇の上にて祈禱のこなし本雨を降らし電氣作用の電閃此摸様よろしく雨の音にて幕あく

宮「謹上再拜〳〵　ト祈禱のこなし此内空より劔を拔き持ちたる悪摩二人釣下けとなり宮と闘ふ事あるべし、悪摩二人ハ取ひしかる

宮「アヲ嬉しやなア　ト しらせにて黒幕を下す雨の音つゞきにて直く黒幕を切て落す

本舞臺面常足の二重釘隠し御殿欄間御簾を下しある御簾の中には向ふ金襖上手に大塔の宮其傍に太刀持　居並らふ總て大塔の宮殿中の体二重の下上手に坊門清忠下手には足利尊氏新田義貞其外群臣上下に居並び此處よろしく　にて御簾をあぐる

ト みな〳〵頭をさゝる

宮「いのよかた〳〵民を憐び御慮に代り立つたる雨の祈季杞ゝ術は學は孫とも湯王の例にあらひ深く新しかひ有て天帝も憐玉ひかゝる奇瑞を見せしめ玉ふは天下の悦ひ

清「命の如く一天の悦ひは則ち四海の悦ひ其上ゆこびの折に幸ひ兼て我を頼み置く夫なる足利尊氏の將軍宣下の綸旨の望み此悦ひの序を以て何卒下しかられ

あはのやうに申我々も大慶恐なから　ト尊氏に向する宮はにつこと笑ひ

玉ひ

宮「亀忽なる清忠の申條此の日の本には帝はましまそすや宣下の綸旨尊氏達ての所望ならは帝へ直くに奏すへし私の斗ひに成へきか　ト尊氏は手をつき

尊「コハ御尤なる宮の御諚去なから某直きに願ひなは武官の身分にして恐多く清忠卿達つての願ひ相摸入道を亡せし功しを宮より奏聞なし下それ何卒將軍宣下の綸旨尊氏に下し置かれなは有かたき仕合

宮「ソヤとよ尊氏相摸入道を亡せしは新田義貞東國に發行鎌倉にかけ向ひて一戰に打勝入道か首取たるは世の人の知る所夫を措き汝斗に綸旨をやらは遺恨の基亂の端願ふは折こそありぬへし

清「コハ宮の御詞なれ覺へを義貞の手柄とは何國とて何の手柄尊氏が追つ返し切つて回つた跡へ行き拾ひ首していかゝ成しう宣下の綸旨は願はゝまい夫とも是非に望む氣か義貞如何に　ト吼けるこなし

義「悪道無道の相摸入道天の罰を受けたる自滅尊氏の功にもあらす勿論義貞か武略にあらす偏に是聖運のめてたき所夫を功に綸旨の望み義貞に於ては微塵

頭候へす　ト此處へ勾當の内侍出て來る

四

蘭奢待新田圖系脚本上の卷終

明治廿七年五月九日印刷
仝　廿七年五月十四日發行　（定價四錢）

大阪府西成郡賀根崎村番外拾八番屋敷
著作者　岡野美春
兼發行者
大阪市西區江戸堀南通四丁目四十五番屋敷
發行者　植木嘉七
大阪市北區堂島裏壹丁目百拾八番屋敷
印刷者　三盛堂　鈴木千代三

版權
興行權
所有